

令和 4 年 5 月 25 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K13193

研究課題名（和文）不登校への大学内多層的支援モデルの構築 日本とカナダの学生支援体制の比較より

研究課題名（英文）The on-campus support system for the non-attendant students: the international comparison between Japan and Canadian universities

研究代表者

竹中 菜苗（Takenaka, Nanae）

大阪大学・キャンパスライフ健康支援・相談センター・講師

研究者番号：20510291

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：研究期間を通じて、まずは不登校事例の特徴を洗い出し、二つのパターンで模擬事例を作成した。次いで、それらの模擬事例に対してどのような対応が想定されるかについて、日本とカナダの大学にて学生支援に携わる臨床心理学の専門家に調査をおこなった。調査の結果、不登校学生へのカウンセリングにおいて、日本の専門家は関係性の構築を重視する回答が多かったことに対し、カナダの専門家はカウンセリングの目的を明確にし、来談学生との間で共有する必要性を指摘する回答が多くみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究期間内に実施した国際比較調査から、不登校学生への学生相談の現場において、誰にとつての、何のためのカウンセリングなのか、という観点を保持することの重要性が明確になった。不登校の大学生は、自分自身が何を望み、どのような将来を思い描いているのかを言葉にすることが往々にして困難である。不登校の大学生への支援体制を構築する際、まずはそこを明確化する作業を起点としなくてはならないと考えられた。

研究成果の概要（英文）：Firstly, characteristics of the non-attendant students were specified, and there created were two mock cases of different types of non-attendant students. Secondly, online survey was conducted with mental health professionals in universities in Japan and Canada, using the mock cases. The results revealed that Japanese professionals tended to focus on building therapeutic relationships with the students, while Canadian professionals were likely to emphasize the importance of clarifying and sharing the purpose of therapy with them.

研究分野：学生相談

キーワード：大学生の不登校 学生相談 心理支援

## 1. 研究開始当初の背景

大学生の不登校について、近年いくつかの調査によって、それが無視できない頻度で存在することが明らかにされている。不登校の増加の背景に、大学進学率の増加による大学のユニバーサル教育化・義務教育化、および、高等教育機関として、教員中心の大学から学生中心の大学への視点の転換といった社会的状況の変化が存在していることが、しばしば指摘される。そうした高等教育機関の位置付けや役割の変化に伴って大学内での重要性が高まってきているものが、学生への大学内メンタルヘルス支援体制である。かつては、大学生を既に自立した成人とみなし、その主体性を尊重して干渉しないことに重点を置く価値観が一般的であったが、近年では大学生を人格形成途上にある存在とみなし、学問的教育のみならず全人的成長を見据えて積極的に関与し、支援していくことの必要性が認識され、学生支援体制の方向性も変化しつつある。

筆者は学生相談室カウンセラーとして大学生のメンタルヘルス支援に携わる立場から、学生の主体性を尊重する支援体制から、より積極的に関与する支援体制への方向性の転換の妥当性と必要性については疑う余地がないと感じている。心理的発達や生活能力が十分とは言えないままに大学に進学し、一人暮らしを開始する学生が以前と比べて多くなっているという実感は、学生相談に携わる専門家の間でしばしば話題になる。特に不登校に関して、筆者が直接・間接的に見聞している事例の中には、医学的治療を必要とするような病理よりも、就寝と起床の時間を自分で管理できないなど、その未熟さに由来していると考えられるものが圧倒的に多い。このことは、現在大学内に準備されている心理カウンセリングやピアサポート、ソーシャルワーカーによる環境調整、キャリアカウンセリング、医学的サポートといった様々な支援資源が有効に活用され、学生に対する適切な心理教育が行われるならば、不登校の長期化・深刻化の予防は大いに可能であることを示唆している。

「社会的ひきこもり」という現象についてと同じく、大学生の不登校についてもわが国以外で問題視され、議論されるということはなく、わが国の教育制度や文化的背景との関連が指摘される。これは大学生の不登校が、当該学生だけの問題ではなく、当事者を取り巻く環境までを含めて捉えられるべき現象であることを意味している。そこで本研究では、異なる文化社会的背景をもつカナダにて学生支援にあたる専門家とわが国の専門家を対象として調査を実施し、大学生の不登校について、支援者側の意識に焦点を当て、その特徴を捉えることを試みる。

## 2. 研究の目的

本研究では、当事者を取り巻く環境との相互作用が強く関係していると考えられる大学生の長期化する不登校について、日本・カナダの大学内にメンタルサポートのために配置されている臨床心理、社会福祉、精神科といった領域の専門家を対象として、不登校に対する認識、望ましいと考える支援のあり方についての考えを調査・比較検討する。文化比較的要素をまじえて専門家側の意識を検討することによって、わが国の不登校学生に対する支援体制の維持と問題点をより明確にし、わが国に特有の不登校の長期化・深刻化を防ぐための支援モデルを提示することを目的とする。

## 3. 研究の方法

### (1) 不登校事例の類型化と模擬事例の作成

まずはこれまでに筆者がカウンセラーとして関わった不登校事例についての個別の検討を行う。検討に際しては各事例における心理的課題、支援体制、事例の帰結という観点から整理し、その後、各事例を合わせて類型化を行う。おおよその類型化ができたところで、さらに広く不登校事例を収集し、類型化の妥当性を検証、洗練し、類型ごとの典型的な模擬事例を作成する。

### (2) 日本とカナダにおける調査の実施

作成された模擬事例を用いて、それぞれの事例をいかに理解するか、どのような支援のあり方が望ましいと考えられるかといった点について、日本とカナダで大学生のメンタルヘルス支援に携わる専門家を対象として、記述回答式アンケートを実施する。アンケート結果を質的に分析し、それぞれの国での特徴が認められるかなど、比較検討を行う。

## 4. 研究成果

### (1) 不登校事例の類型化と模擬事例

まず大学生の不登校の事例の特徴を概観したところ、大きくは、発達の偏りも考慮に入れるべきと考えられるような、こだわりの強さやセルフコントロールの効かなさが認められるケースと、そのような特性に起因するものが認められず、また、不登校という状況に対する葛藤も認めにくいケースという二つのタイプが抽出された。それぞれのタイプについて作成された模擬事例の概要は下記の通りである。

【事例A】理系学部男子、一人暮らし。1年生時には登録したすべての単位を好成績で取得。2年生の語学の授業にて、自分でテーマを設定し、それについて調べて発表するという課題が与えられた際、テーマを決めることができず、誰にも相談することのないまま前日を迎えてパニック状態になる。その授業を欠席したことを契機として、その日のそれ以外の授業もすべて欠席、翌日以降も欠席がちになる。大学を休んだ日は終日家にいて、日中は寝ていることが多い。夕方以降からゲームやネットサーフィンをはじめ、昼夜逆転の生活になる。

【事例B】理系学部男子、一人暮らし。在学1年目は順調に単位を取得していたが、専門的な科目が増える2年生になり、徐々に授業を欠席するようになる。在学2年目以降は取得単位はゼロだが、大学には来て食堂やサークルの部屋を利用している。夕方～夜はアルバイトを継続している。家にいる時は大抵アニメやSNSを見て過ごしている。なんとなく一緒に出かけたりする友人はいるが、自分の状況などについてはほとんど人に話さない。

## (2) 調査の実施

日本とカナダの大学内の学生支援の専門家に対し、上述した2つの事例について、このようなケースの経験の有無、当該学生に対する印象および見立て(心理的課題)、大学内での支援の方法について(連携の有無)、その他、という項目を設定し、それぞれに自由記述形式で回答を求めた。

調査の結果、大学内での支援の方法についての箇所にて、個別のカウンセリング関係に対する言及に日本の専門家の回答とカナダの専門家の回答の特徴の違いが認められた。すなわち、日本の大学において心理支援に携わる専門家は、面接の初期段階で当該学生との関係性の構築に重点を置く傾向があることに対し、カナダの専門家はカウンセリングを開始するにあたっての当該学生の目的の明確化に重点を置く傾向があった。また、目的を明確にした上での焦点化された面接を短期間に行う、という回答もあり、これは日本での調査ではまったく得られなかったものであった。この結果から、わが国の学生支援の現場では、不登校の学生に対し、受容的なカウンセリング関係を基盤とし、その上で不登校の学生の心理的成長を涵養しようというモデルが浸透していることを再確認するとともに、課題解決に向けた学生の能動的な姿勢や主体的な意思決定を起点に置くという考え方の隔たりが明らかになった。

不登校の大学生のカウンセリングにおいて、関係性に重点を置き、意思決定の中心に来るはずの「主体」が不在になるというあり方は、1980年代に河合隼雄が「中空構造」として捉えた日本人の心理のあり方に一致する。大学生の不登校という現象には、深く日本人特有の心理構造が関係していると考えられる。社会全体がこのような構造を維持している場合には特に主体不在のあり方が問題になることもないと考えられるが、大学という空間に限って言えば、単位の取得、あるいは退学という意思決定は当人の主体無くしてはあり得ず、また、学生相談の場でのカウンセリング関係にも年限がある。関係性の構築に主眼を置く心理支援のあり方がどこまで不登校の学生の効果的なカウンセリングになり得ているか、また、関係性から主体を育むモデルではなく、問いを投げかけることによって主体の発現を促進するという、より積極的なカウンセリングモデルの有効性について、今後の検討が必要であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 竹中菜苗	4. 巻 8
2. 論文標題 ある不登校の大学生の事例が示した「殻」イメージの重要性—臨床事例および小説『コンビニ人間』の検討を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ユング心理学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 竹中菜苗
2. 発表標題 現代の青年期に見る「出会わなさ」—長期にわたり大学に在籍した青年期男性の2事例から—
3. 学会等名 日本箱庭療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nanae Takenaka
2. 発表標題 The psychological difficulty seen in the Japanese young adults today.
3. 学会等名 International Society for Psychology as the Discipline of Interiority, 4th International Conference. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nanae Takenaka
2. 発表標題 The difficulty of encountering one's own other in the clinical case of a young adult in Japan
3. 学会等名 International Society for Psychology as the Discipline of Interiority, 5th International Conference. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Nanae Takenaka (Ed. Thomas Singer)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Spring Journal Books	5. 総ページ数 未定
3. 書名 East Asian Cultural Complexes	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------